

実践編

Ⅱ 遊びや生活の中の学び・育つ力

ここでは、次の三つの柱でそれぞれの実践例を紹介しています。

- 1 小学校（スタート期）へのつながりを見通そう
- 2 アプローチ期のカリキュラムを見直そう
- 3 小学校や地域・家庭と連携した取組を工夫しよう

実践例はこちら

■ 幼保小のつながりを見通した実践例 ■

- 小学校の生活場面を見通した実践・・・・・・・・ 33～34
- 特別な支援が必要な子どもへの実践・・・・・・・・ 35～38

■ 「三つの力」を育てるための実践例 ■

- 「生活する力」を育てる実践・・・・・・・・ 41～42
- 「かかわる力」を育てる実践・・・・・・・・ 43～44
- 「学ぶ力」を育てる実践・・・・・・・・ 45～46
- 「三つの力」を総合的に育てる実践・・・・・・・・ 47～50

■ 小学校との交流を生かした実践例 ■・・・・・・・・ 51～54

■ 地域とのかかわりを生かした実践例 ■・・・・・・・・ 55～56

■ 家庭との連携を生かした実践例 ■・・・・・・・・ 57～59

Ⅱ 遊びや生活の中の学び・育つ力

1 小学校（スタート期）へのつながりを見通そう

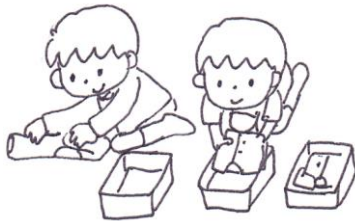
(1) スタート期につながる、アプローチ期の姿を押さえる

◆ 幼保等と小学校の違いを確認する

＜参考例＞生活に必要な活動を自分で行う（衣服の着脱、自分の持ち物の始末等をする）

幼稚園・保育所等

- 共有で使用する机や椅子は、普段は並べず、広い活動スペースが確保されている。



- 衣服の着脱は、床に座って行い、脱いだ衣服をたたんで椅子の上に置いたり、かごの中に入れていたりする。

小学校

- 一人一人に指定の座席があり、学用品をはじめ体操着、上履き等自分で管理し、ロッカーなどの収納場所が決まっている。



- 短時間で授業の準備をしたり、着替えをしたりする。着替え後は、脱いだ服をたたみ、椅子や机の上に整頓しておく。



参 考

幼稚園・保育所等から小学校へつなぐ「三つの力」チェックシート(資料 P61～P68)を参照して、アプローチ期とスタート期の違いを確認してみましょう。



◆ 幼保等と小学校とのつながりをつかむ

- ❖ アプローチ期に目指す子どもの姿が、スタート期にどのようにつながるのかを、「三つの力」を基に一つ一つ見ていきましょう。
- ❖ スタート期（4～5月）の目指す子どもの姿から、アプローチ期に、一人一人の幼児が「三つの力」における目指す姿に育っているかを確認し、課題を見いだしたり、手立てを考えたりしていきましょう。

【参照 理論編P15～P20のアプローチ期からスタート期へのつながり＜目指す子どもの姿＞】

(2) アプローチ期に必要な体験を考える

<参考例> 生活する力（アプローチ期からスタート期へのつながり P15～P16）

◇ **スタート期で指導することは、アプローチ期とどのようにつながっているのか見てみましょう。**

<スタート期> ・学校の施設や固定遊具などの使い方を知り、安全に活動する

<アプローチ期> 自分の体を大切にし、安全に行動する

◇ **アプローチ期にどのような体験をしておくとおよいのか考えてみましょう。**

戸外で十分に体を動かして遊ぶことが大切だね。

自分自身の実体験も大事だし、友達の行動を見て、安全・危険の判断を学ぶこともあるかな。

転んでけがをする経験から、転びそうになったら手をつくなど、自分で身を守ることも覚えていくよね。



◇ **具体的な場面を思い浮かべてみましょう。**

鬼ごっこでは、友達の動きを見て、すきをねらったり、鬼につかまらないよう身をかわしたりして機敏な動きが養われると思う。



揺れているブランコの前後を通らないとか、滑り台の上から前の友達を押しでは危険だとか、楽しく遊ぶための安全指導を重ねてきているよね。

職員間の話し合いから
共通理解できたこと

- ・ 幼児自身が“自分の体を大切にし、安全に行動する”ことができるように、いろいろな場面で、正しい遊具の使い方、危険につながる行動の見極めなど丁寧に指導していくことが大切である。
- ・ 時には言葉で教えたり一緒に遊びながら伝えたりするなど、状況に応じて、幼児が友達と一緒に楽しく安全に遊ぶことが体験できるような時間とじっくり取り組める場を十分に保障していくことが大切である。

小学校（スタート期）へのつながりを見通すためには

♥ 担任の先生は・・・

保育者自身が小学校のスタート期の生活をしっかりと把握しましょう。一人一人の発達の姿から、幼児にとって必要な体験を考えてみましょう。

♥ 園全体で・・・

アプローチ期だけでなく、それまでの各年齢での体験の積み重ねが必要であることを職員間で共通理解しながら、小学校へのつながりを考えていきましょう。



■ 幼保小のつながりを見通した実践例 ■

□ 小学校の生活を見通した実践

見通しをもって生活できるようにするために

小学校のスタート期では、チャイムを合図に1時限45分間（始めは15分間くらいの単位に区切る）座席に着席して学習します。また、時間割表を見て、次の授業の準備を休み時間の内に行くなど、一日の生活の流れについて見通しをもった行動をとることが求められます。

ポイント

アプローチ期には、幼児自身が1日の生活の流れが分かり、時間の見通しをもって、行動しようとするようにしていきましょう。

幼稚園・保育所等によっては、1日の活動の流れの区切りが様々です。中には、学校のように活動の区切りをチャイムのような合図で行っている園もあるようですが、大切なのは、幼児自身が1日の流れをつかみ、次に何をするかを考えたり、周りの状況を見て、自分はどうしたらよいのか判断したりして行動できるようになることです。

「先生は、教えなくてもいいからね！」 10月

K先生は、なかなか片付けに取りかかれぬ子どもたちが、次の活動のことを意識して、区切りをつけられるにはどうしたらよいのかと悩んでいました。

先輩の先生に相談すると、「K先生は、指示の言葉だけで子どもたちを動かそうとしていない？ 子どもたちが、次の活動を楽しみにして自分たちで片付けようという気持ちになるように考えてみては？」とアドバイスを受けました。

そこで、K先生は子どもたちが片付けの時間を意識できるように、時計の文字盤の横に色の違うシールを貼りました。「みんな、時計を見てね。今日はこの針が6、青のところになったら片付けて、その後、みんなでお楽しみゲームをしたいと思います。」

「今日はみんなに任せようと思うけどいいかな？」と声を掛けると、子どもたちの目が輝きました。

「先生、まかせて」「かんたん、かんたん！」

「先生は、教えなくていいからね！」

こうして、いつも通り遊びは始まりました。

子どもたちは時々時計を気にしながらも、何だか

楽しそうです。そして、長い針が6を示すと、待っていましたとばかり片付け始めました。

いつもより念入りに片付いた保育室を見て、驚いたり、喜んだり、感心したりしているK先生に自慢げな表情で胸を張る子どもたちでした。その後も積極的に片付けに取り組もうとする子どもたちの姿に頼もしさを感じるK先生でした。



保育者が意識していくこと

- 園での生活は一日の流れが大体決められているものの、発達や個人差を考えゆとりをもって次の行動に移っていくように配慮しています。環境を見直したり、保育者の働きかけを考えたりしながら、少しずつ幼児たちが主体的に取り組むことができるようにしていくことが大切です。
- アプローチ期には集団としての力も伸びてきています。「〇〇（いつ）までに～しよう」と幼児たちが決めることを増やしていくと、幼児たちは自分で決めたことに責任をもち、力を合わせてやり遂げようとします。そのような姿を認めることで、集団としても力がついていきます。



生活の見直しや環境の構成の工夫

○ 文字や数字に興味をもち、身の回りの掲示物や時計に親しませる

- カレンダーや1日の予定を示すホワイトボード、時計などは幼児の目線で見やすい位置にします。

文字や数字が読めない幼児にも分かるように、カレンダーやホワイトボードには行事予定と内容が分かるイラストを書き込みましょう。時計は、時計を見るという経験を生活に取り入れながら、時計のおもちゃで遊んだり作ったりして親しめるようにしましょう。



片付けの時刻を示す時計・1日の予定ボード

○ 日、週、月の行事や活動予定に興味をもち、楽しみにできるようにする

- 月の予定だけではなく、週の予定も掲示すると「一週間」の曜日にも興味をもちます。「今日は水曜日だから、〇〇の日だね」などと、曜日の違いを意識した会話が交わされるようになります。また、降園前には明日の予定を知らせたり、1日の始まりには今日の予定を確かめたりして、自分たちで何をするとよいかを考えながら生活ができるようにしましょう。

○ 周りの状況を見て行動できるようにする

- この時期、幼児は友達の行動をよく見ています。友達のまねをして自ら行動しようとしたときには、その姿勢を認めたり、幼児同士で声を掛け合うように働きかけたりしましょう。

○ 身の回りの整理整頓や次の活動の準備ができるようにする

- 自分の身の回りの始末や次の活動の準備を進んで行うようになるためには、自分の持ち物を大切に、手際よく始末ができるように、整理整頓の仕方を知らせたり、保育者がやって見せたりして一人一人に丁寧に指導していきましょう。

□ 特別な支援が必要な幼児への実践

小学校の生活を見通して、就学を迎えるために

特別な支援を必要とする幼児への対応は、一人一人異なります。また、保護者とのかかわり方もその幼児の発達の状況によって様々です。しかし、共通して大切にしたいことは、幼児の育ちを第一に考え、保護者、小学校関係者、関連機関との連携を密に取りながら、幼児の今後の成長にとって、一番望ましい方向を見いだしていくことです。

また、就学前の生活の中で、学級の仲間の一人として温かく受け入れられ一緒に過ごす経験を積み重ねておきましょう。

その幼児にとっても、周りの幼児にとっても、就学後の育ちにつながる大事な経験となります。



ここでは、特別な支援が必要なA児が、小学校入学を楽しみにし、保護者も安心して我が子の就学を迎えられるように、小学校へつないだ実践を紹介します。

A児の姿

<診断名> 自閉症スペクトラム

- A児は、明るく保育者や友達に話しかける。一人で遊んでいることが多かったが、同じ遊びを好む友達や気の合う友達と遊ぶようになり、友達とのかかわりも広がりつつある。
- 集団で活動することは苦手で、特にルールのある遊びや運動遊びはやりたがらない。
- 初めての体験やいつもと違うことが起きると大きな不安を感じる。分からないことやできないと思える遊びや活動を強く拒む。
- 何が嫌なのか、不安なのか、どうして欲しいのかなど、うまく言葉に表すことができず、怒ったり、泣いたり、その場から離れたりする。

保護者の思い

- A児が終始通常学級で生活することは難しいと考えている。
- 特別支援学級では、今までの友達と離れてしまい、新たな友達関係が広がらないのではないかと心配している。

予想されるA児の戸惑い

- 園ではゆっくり時間をとり、初めての活動は、みんなが活動している姿を見ている時間を保障し、本人が安心して取り組みだすまで待っていた。時間が決まっている小学校生活では安心して活動に取り組めるようになることが難しいのではないか。
- 集団活動や模倣が苦手なので、体育や音楽などの教科は、取り組みにくいのではないか。
- 自分の気持ちを言葉で思うように伝えることが難しいので、本人の気持ちが周りに伝わりにくいのではないか。
- 授業内容において、できる・できないがはっきりすることが多いので、自信を失いがちになるのではないか。



小学校との連携

- 園での日ごろの様子や行事の様子などを小学校の先生に見てもらう。
 - ・ 日常生活や遊び、行事の時など、いろいろな場面でのA児の姿を見てもらった。
 - ・ A児のよさや苦手としていること、また、保育者がフォローしている内容を伝えた。
- 本人が小学校の様子を知り、小学校生活に安心感がもてるようにする。
 - ・ ふだんの授業の様子を見学する機会を数回もった。
 - ・ A児は話をすることが好きなので、学校の先生からA児に好きなことや知っていることなどを聞いてもらう機会をもった。



小学校の先生に話しかけてもらい、A児は“小学校、好き”“先生も好き”“行きたいな”と思うようになっていった。

保護者との連携

- 保護者の希望と小学校側の考えを調整する。
 - ・ 保護者と小学校の先生とで話し合いが行われたが、保護者の意向と小学校側の考えにずれがあり、後日保護者と保育者が話し合った後、園と小学校で話し合った。
園からは、A児は友達が好きで一緒に遊ぶ様子や、園の活動で得意なことと苦手なことを詳しく伝えた。そして、通常学級で過ごす時間をできるだけ増やしてもらうように要望した。
- 園生活の様子を知らせたり、家庭の様子を聞いたりして保護者と共通理解を図る。
 - ・ 同じA児の姿でも保育者と保護者では受け止め方が違っていた。「こういうことはすぐにはできないけど何度か繰り返すとできますよね」など、擦り合わせを行った。

保護者は、小学校側ができるだけ通常学級との交流の時間をもつようすることを約束すると安心して納得した。



関連機関との連携

- 医療機関に同行し、医師と支援について話し合う。
 - ・ 保護者は、A児の発達を補いたいと思い、早めにいろいろなことを教えようとしていた。園にもそれを要望した。保育者は保護者と共に直接医師と相談して、A児に合った支援の仕方を助言してもらい、医師の助言を小学校へも伝えることができた。

小学校へつなぐこと

- 経験のないこと、初めての出来事、先がどうなるか分かりにくいことなどは、A児が見て理解する時間を保障したり、先を見通せるように知らせたりして、本児の気持ちに寄り添いながらスモールステップで進めてきたこと、また『やってみたら楽しかった』『大丈夫だった』という実感がより味わえるよう、保育者や気の合う友達と一緒に安心できる楽しい雰囲気の中で、A児の心の動きを見ながら支えてきたことを具体的に丁寧に伝える。
- 小学校へ行っても、友達との関係はA児の支えになる。保育者のかかわり方だけでなく、友達がどのようにA児にかかわり、A児がどのように反応するかなど、集団の中でのA児の姿と周りの幼児のA児を受け入れてきた様子なども伝える。
- これまでの取組や具体的な手立て、その成果などを記録した個別の教育支援計画、個別の支援ファイル、あるいは保護者のメモなどを、保護者の了解のもと、小学校へ引き継げるとよい。

特別な支援が必要な幼児の就学について

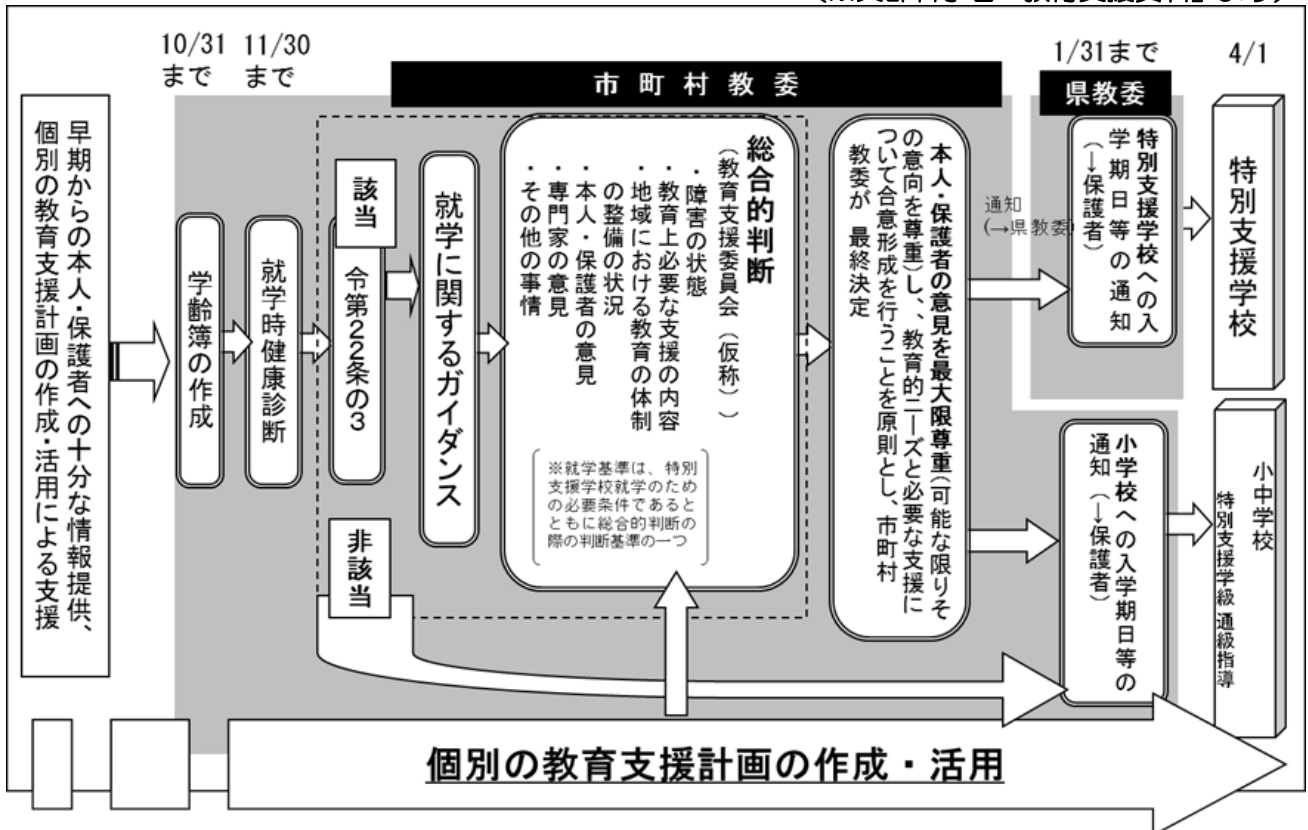
1 就学までの流れ

特別な支援が必要な幼児が、就学するにあたって、就学までの流れを把握しておきましょう。



○ 「障害のある児童生徒の就学先決定について(手続の流れ)」

(※文部科学省「教育支援資料」より)



- 早期からの本人・保護者への就学に関わる十分な情報提供に努めましょう。
- 就学先の決定に当たっては、市町村教育委員会が、様々な観点から総合的に判断し、保護者との合意形成のもとに、決定します。

○ その子に応じた「学びの場」

★ 特別支援学校における指導 ★

小・中学校等に準ずる教育を行うとともに、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識、技能を養うことを目的として、指導内容・方法を工夫した一人一人の障害に応じたきめ細やかな特別の指導を行います。

★ 特別支援学級における指導 ★

個別の教育的ニーズを把握し、障害による学習上又は生活上の困難を克服するため、少人数による適切な指導や必要な支援を行います。

★ 通級による指導 ★

通常の学級に在籍し、ほとんどの授業を通常の学級で受けながら、障害の改善・克服のための特別な指導を特別に設置した通級指導教室で行います。

保護者とともに、一人一人に応じた学習環境を考えていきましょう

